

1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 8月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
べと病	-	やや少	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 8月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
黒斑病・葉枯病	-	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ネギコガ	第4世代 やや早	やや多	(1) 有効積算温度から推定される第3世代の羽化始期は、平年よりやや早い。 (2) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (3) 8月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。(＋)
ネギハモグリバエ	-	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(＋) (2) 8月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。(＋)
ネギアザミウマ	-	多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(++) (2) 8月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○ネギアザミウマが多発しています。6月25日発表 病害虫発生予察情報 注意報第3号を参照し、直ちに効果の高い薬剤を散布しましょう。

【共通事項】

- (1) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (2) 発生病害虫にあわせ、効果の高い薬剤でローテーション防除する。

【ネギアザミウマ・ネギハモグリバエ】

- (1) それぞれの害虫に適用のある薬剤で防除する
- (2) ネギハモグリバエとネギアザミウマの食害が両方見られる場合、ディアナSCやベネビアOD、グレーシア乳剤、ファインセーブフロアブル、ダントツ水溶剤等、両害虫に適用のある薬剤を選択する。
- (3) 定期的な防除を実施し、密度低下を図る。

【さび病・べと病】

- (1) 気温が低下する8月後半以降、発病が多くなるため定期的な防除を継続する。
- (2) 降雨が続くと発生が増加するので、薬剤散布は降雨前に行う。

【黒斑病】

- (1) 梅雨期等から発生が見られ、気温が低下する8月中旬頃から急増するため、予防散布や発病初期の防除に努める。

【葉枯病】

- (1) さび病やべと病の病斑に二次的に感染するため、これらの病害にも効果のある薬剤を選択する。
- (2) 褐色斑点病斑（図1左）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（R2-2病害虫防除技術情報「ネギハモグリバエB系統の被害の特徴」参照）。
- (3) 黄色斑紋病斑（図1右）の発生が9月頃から増加するため、収穫時期に合わせて、葉枯病の対策を中心に据えた防除を実施する。



図1 葉枯病の病斑
(左：褐色斑点病斑、 右：黄色斑紋病斑)

【ネギコガ】

- (1) 幼虫が葉肉内に侵入してからでは防除効果が劣るため、羽化時期から防除を実施する。
- (2) 有効積算温度から推定される第4世代の防除適期は、県中南部では平年よりもやや早い7月第6半旬である。

3 防除上の留意事項

- (1) 圃場の土壌水分が高いと、べと病、黒斑病、軟腐病、白絹病等が発生しやすくなる。また肥料切れや肥料過多によって発生が助長されるため、適切な肥培管理に努める。
- (2) 収穫期が近い作型では、使用時期（収穫前日数）に特に注意して薬剤を選択する。
- (3) QoI剤は、耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。